

巻頭言

私の専門は地震学であり、主な所属学会は日本地震学会である。日本惑星科学会の会員になったのは約5年前のことである。そのきっかけは、月震と月の内部構造の研究に興味を持つようになったからである。私はこれまで主に地震波トモグラフィーという手法を用いて地球内部の3次元構造とダイナミクス及び地震火山活動を研究してきた。40年前のアメリカのApollo計画で月面の4箇所に地震計が設置され、1969年から1977年にかけての8年間に約1万2千個の月震が観測された。この月震観測のデータを用いて、これまで多くの研究者が月内部の深さ方向の1次元速度構造を研究してきたが、その3次元構造を研究した例はなかった。その理由は、月震観測点数が少なく、またデータの精度もあまり高くないと思われたからだろう。私は、地球の地殻構造の研究で2点のみの地震観測点を用いた地震波トモグラフィーを行った経験があるので、大胆にも、Apollo月震観測データを使って月内部の3次元トモグラフィーの決定を試みたが、想像以上の良い結果が得られたと思う。この研究に関する論文を発表した後、月科学の有名な専門家も興味を示してくださった。中国語には、「他山之石、可以攻玉」という諺があり、ある山の粗末な石でも、別の山の宝石を磨くのに役に立つという意味である。地震波トモグラフィーは、惑星科学の「他山の石」のようなものかもしれない。

私が1980年代の後半に日本に留学した時、日本の大学に外国出身の教員はほとんどいなかった。当時の私は、後日日本の大学の教員になるとは夢にも思わなかった。いまは日本の大学の多くの研究分野に外国出身の教員が在籍している。最近の地球惑星科学分野の大学教員公募書類の「応募資格」の項目に、「国籍は問わないが、日常的に日本語が使えることが望まれる」と書いてある。日本の大学と日本社会は世界にかなり開放されてきたと感じる。

今年の2月に、EGUのSolid Earthという専門誌に、福島第一原子力発電所のすぐ近くにある双葉断層帯で直下型地震が発生する可能性に関する論文を発表した。純粋な科学研究の結果であるが、意外にも国内外のマスメディアで広く報道され、東京電力や日本政府の原子力政策へのさらなる批判を招いてしまったかと思う。これは大変厄介なことになったと私は非常に心配したが、結局自分が非難されることもなく、むしろ多くの方々に親切に励まされた。日本社会はすでに、耳に逆らう忠言を受け入れることのできる成熟した民主的な社会になっていると思ひ、敬意を表したい。

これからも、一つの「他山の石」として、日本の地球惑星科学の発展に微力ながら尽力したいと思う。

趙 大鵬 (Dapeng Zhao) (東北大学大学院理学研究科)